



# 伝統工法・真壁・板張り外壁でも

## 松井郁夫建築設計事務所「高円寺の家」

# 準耐火建築を実現

昨年暮れ、東京都杉並区の住宅が密集する地域に、伝統工法による住宅が竣工した。構造材を太くする燃えしろ設計や外壁の工夫によって、準耐火建築物でありながら真壁仕様・板張り仕上げの外壁を実現。モルタルやサイディングの建物が並ぶ中で圧倒的な存在感を放つその住宅は、耐火性と木材の利用という、一見相反する条件のような条件を高いレベルで両立させている。

その他、建具や家具もこのために設計されたオリジナルの木製のものを使用。あらゆる部位において木のテクスチャーが穏やかな雰囲気を醸し出している。

### 150mmの梁で燃えしろを確保

「高円寺の家」を設計したのは、(株)松井郁夫建築設計事務所(東京都中野区)。施工は(有)キューブワン・ハウジング(東京都国分寺市)が担当した。81・82㎡(24・75坪)建べ率60%の敷地に建つのは、延べ床面積63・22㎡(19・12坪)の木造2階建と小規模ではあるが、庭を設けたコートハウスになっている真壁仕様だ。15㎜厚の桧材を使った床に、内壁は漆喰塗り、ソドックスな仕上げ。産の桧材を使用。もちろん組みの家を多数手がけてきた同事務所ならではの、金物は使わずに貫や足固めを用いた伝統工法による木構造仕上がりになっている。

一方、この住宅の敷地は、東京都条例における新防火地域内に位置している。条例に従うと、原則として準耐火建築物以上の性能を持つ建物としなければならない。もちろんこの住宅も準耐火だが、

どのよう基準をクリアしつつ木を見せているのだろうか。同事務所にとって、「木組みの家」で準耐火に取り組んだのはこの「高円寺の家」が初めてだという。まず、梁などの構造材を150㎜角と太くして燃えしろを確保した。2階部分の板張りの外壁は、モルタルの上から桧材を張ることで防火構造としている。こうして、木をあらわした仕上げと準耐火性能を見事に両立させている。

物でありながら、内外ともに木材をふんだんに、あらわして使用している点が注目を集めており、林野庁や東京都都市整備局が見学に訪れたという。木造による準耐火建築物の可能性を最大限に引き出している事例だといえるだろう。



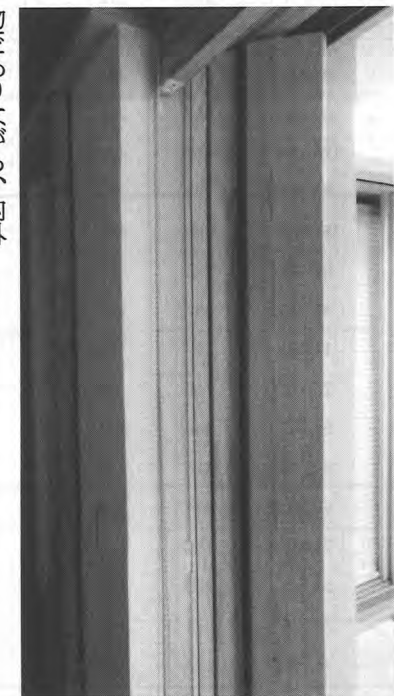
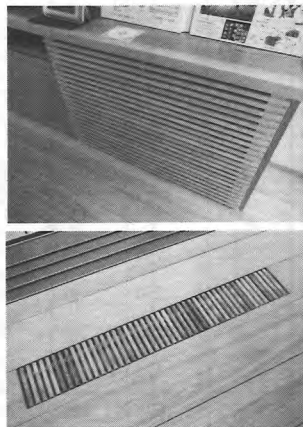
燃えしろを考慮した150mm角の梁

### エアコンの送風は床から

現代の住宅ならば、温熱環境は工法を問わず気になる部分だ。「高円寺の家」は、日射・通風を利用するパッシブデザインが基本だが、エアコンを1台だけ設置する。

1階ダイニングの棚内に隠されたエアコン＝写真上＝の風は、床下を通過して1階床に設けられた送風口＝写真下＝から緩やかに吹き出す。1・2階は吹き抜けになっているので、全室の空調をエアコン1台でまかなえる。

その他、床スラブへの蓄熱や太陽光パネル設置により、昨冬の電気代は1カ月2500円程度だったとのこと。



サッシを開け放つ時は「ふた」が閉められるなど細かい工夫も